

02 歴史展示の具体的内容

歴史ストーリーの作成

奈良の価値である「歴史」をわかりやすく伝えるため、この時代を生きた先人の「思い」や「気概」を基に歴史ストーリーを作成する。

奈良時代を彩る代表的な人物とエピソードの整理

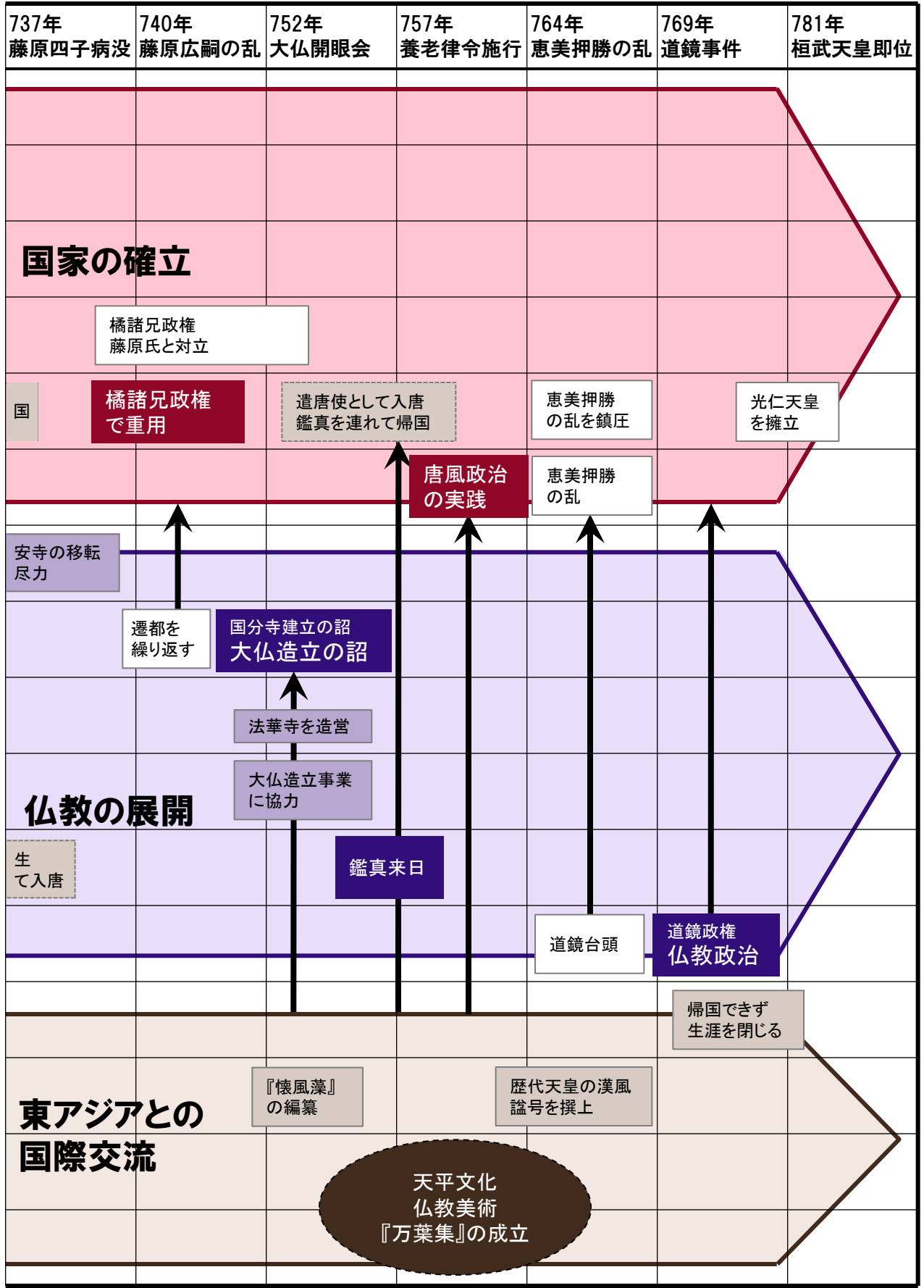
奈良時代は、飛鳥時代などに比べ資料や記録が多く、様々な出来事や人物によるエピソードが多く残っている。

歴史ストーリーを作成するにあたり、テーマ毎に代表的なエピソードについて、時代を追って次表のとおり概観した。

基本的な考え方

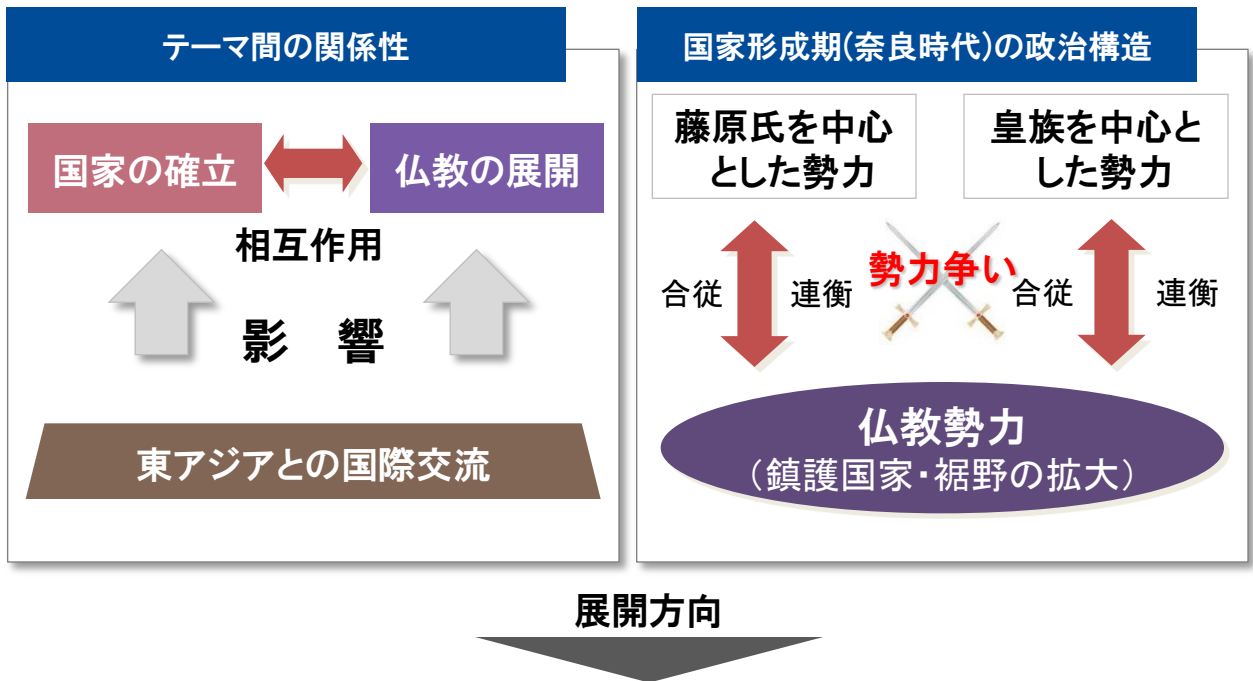
奈良時代を彩る代表的な人物とエピソード概要

	694年 藤原京遷都	710年 平城京遷都	712年 古事記完成	720年 日本書紀完成	724年 聖武天皇即位	729年 長屋王の変
栗田真人	遣唐使として入唐 帰国後の改革に関与					
藤原不比等	大宝律令制定に尽力 平城京遷都に関与	興福寺を創建	養老律令の編纂			
長屋王			仏教の守護者 儒教の守護者		長屋王政権 藤原氏との確執	
橘諸兄						
吉備真備			留学生として入唐			帰
藤原仲麻呂						
道慈	留学生として入唐		帰国			大に
聖武天皇					聖武天皇即位	
光明皇后					悲田院・施薬院の設置	光明子が皇后となる
行基	百済系渡来人の子孫	各地を遊行し社会福祉活動を実施				
普照						留学とし
道鏡						
阿倍仲麻呂			留学生として入唐		玄宗皇帝に仕える	
淡海三船						
山上憶良	遣唐使に同行して入唐				貧窮問答歌を作る	
太安万侶			『古事記』を撰上	『日本書紀』にも関与		



基本的な考え方

エピソードの整理から見えてくる関係や構造



①エポックメイキングな出来事や、主要人物にまつわるエピソードをつなぎ合わせて、奈良時代における「テーマ間相互の関係性」や「国家形成期の政治構造」を踏まえ、各テーマを分かりやすく表現する。

②明日香の歴史展示実施計画の手法を踏まえ、テーマにふさわしい歴史上の人物を選定し、これらの人物が語り部となって歴史ストーリーを物語る。

通 史		
<語り部> 太安万侶		
国家の確立	仏教の展開	東アジアとの国際交流
<語り部> 藤原仲麻呂	<語り部> 行基 良弁	<語り部> 吉備真備

02 歴史展示の具体的内容

歴史ストーリー

通史ストーリー

語り部 太安万侶

＜奈良時代の通史＞ 概要

平城京遷都から始まる奈良時代の歴史は、藤原氏と皇親勢力との対立という構図で政治が推移し、国家仏教の広がりの中で、鎮護国家の思想として仏教が政治に関与していきました。また、遣唐使に代表される国際交流は、政治体制を充実させるとともに、仏教の発展、文化の国際化に大きな影響を示し、東大寺の大仏造立とその開眼供養会が国家的大事業として推進されました。このように仏教色に染まった政治の刷新を図るために長岡京へと遷都される8世紀末までの、奈良時代の歴史を概観的に紹介します。

【1】飛鳥から奈良へ

702年の遣唐使は、律令国家の体裁を整えた日本が、その威信を示すために派遣されましたが、逆に多くの課題を抱えて帰国しました。栗田真人の報告を受けた藤原不比等は、その課題を解決するために、記紀の編纂、和同開珎の流通、養老律令の編纂などの政治改革を推進しました。そして710年、元明天皇は平城京に遷都し、奈良時代が幕を開けました。



【2】長屋王と藤原四子の対立

藤原不比等の死後、天武天皇の孫・長屋王が政治の主導権を握りました。三世一身法の制定による税制改革や蝦夷征討による治安維持策を推進した長屋王は、光明子の立后をめぐって藤原四子と対立するようになり、729年謀反の疑いをかけられて自殺に追い込まれました(長屋王の変)。その後、光明子は皇族以外で初めての皇后となり、それを背景に藤原四子が政治の実権を握りました。ところが、737年、天然痘が大流行し、藤原四子が相次いで亡くなると、政界は危機的な状態に陥りました。



【3】鎮護国家の実現

光明皇后の異父兄である橘諸兄が実権を握ると、下級氏族の吉備真備や僧玄昉らを登用しました。ところが、これに不満をもつ藤原広嗣が九州で反乱を起こし、社会不安が拡大します。動揺した聖武天皇は遷都を繰り返し、やがて社会の安定を仏の加護に求めるようになり、大仏造立による鎮護国家の実現を目指しました。そして行基らの協力を得て東大寺に大仏が完成し、752年、開眼供養会が盛大に開催されました。さらに753年、唐から高僧・鑑真が来日、東大寺戒壇院等において多くの僧尼に正式な授戒が行われて戒律制度が整備され、鎮護国家は現実のものとなりました。



【4】恵美押勝の改革

藤原仲麻呂が実権を握ると、相次ぐ造宮や大仏造営に伴う徴税に苦しむ庶民の負担を軽減し、また橘諸兄によって登用されていた吉備真備を九州に左遷するとともに、反対派の橘奈良麻呂の乱を鎮めて権力を確固たるものにしました。そして祖父の不比等が手がけた養老律令を施行し、官名を中国風にするとともに自らの名も恵美押勝と改めて、政治の唐風化を図る改革を推進しました。



【5】政界の混乱と刷新

病氣平癒をきっかけとして孝謙上皇の寵愛を受けるようになった僧道鏡の台頭に脅威を感じた藤原仲麻呂は、先手を打って挙兵しますが、逆に鎮圧され失脚しました。重祚した称徳天皇(孝謙上皇)は、道鏡を重用して仏教政治を展開し、ついには道鏡を皇位に就けようとする事件が起こるなど政界が混乱しました。称徳天皇がなくなると道鏡は関東に左遷され、その後実権を握った藤原百川らによって擁立された桓武天皇は、仏教色の強くなった政界を刷新するために、784年、長岡京へと遷都し、奈良時代は幕を閉じました。

語り部: 太安万侶

【おおのやすまる】(生年不詳～723)

奈良時代の官僚・学者。太安麻呂、太安萬侶とも記される。
704年、従五位下、711年、正五位上に叙せられる。
711年、元明天皇に稗田阿礼の誦習する『帝紀』『旧辞』を筆録して史書を編纂するよう命じられ、翌712年正月、天皇に『古事記』として献上する。
715年には従四位下に叙せられ、翌716年、氏長(うじのかみ、氏上)となる。
子孫とされる多人長(おおのひとなが)によれば、『日本書紀』の編纂にも加わったという。
723年、民部卿・従四位下で死去。

奈良時代の略年表

時代	天皇名	政権の主導者	主なできごと
飛鳥時代	天武		680 薬師寺建立を発願
	(持統称制)		689 飛鳥浄御原令の施行
	持統		694 藤原京遷都
奈良時代	文武		698 薬師寺完成(本薬師寺) 701 大宝律令完成 702 遣唐使(粟田真人ら)
	元明	藤原不比等	710 平城京遷都 興福寺建立 712 『古事記』完成
	元正		716 大安寺建立 717 遣唐使(吉備真備ら入唐) 718 養老律令編纂 薬師寺移転、元興寺建立 720 『日本書紀』完成
		長屋王	723 三世一身法の発布
	聖武		729 長屋王の変 光明子の立后
		藤原四子	734 遣唐使(吉備真備ら帰国)
		橘諸兄 (吉備真備 僧玄昉)	737 天然痘の大流行 740 藤原広嗣の乱 741 国分寺建立の詔 743 大仏造立の詔 745 平城京復都 聖武上皇の遺品を正倉院に献納する
	孝謙		752 大仏開眼供養会 754 鑑真が来日し、東大寺で授戒を行う 756 聖武上皇の遺品を正倉院に献納する
	淳仁	藤原仲麻呂 (恵美押勝)	757 橘奈良麻呂の乱
	称徳	道鏡 藤原永手 吉備真備	764 恵美押勝の乱 765 道鏡が法王となる 769 道鏡事件(宇佐八幡宮神託事件)
	光仁	藤原良継 藤原百川	○ この頃『万葉集』が成立
	桓武		784 長岡京遷都
			788 最澄、比叡山に延暦寺建立 794 平安京遷都

〈奈良時代の通史〉 ストーリー詳細

太安万侶の語りによる「通史ストーリー」についての解説

[太安万侶]

私は太安万侶。奈良時代初期の中級官人です。記紀の編纂に携わり、奈良時代以前の歴史を整理するとともに、その後の史書編纂の手本となる体系を創り上げました。

奈良時代の歴史は、藤原氏と皇親勢力による政治の主導権争いに、鎮護国家の思想に基づく仏教文化と遣唐使の派遣による国際交流の影響が絡み合い、律令国家としての確立と仏教色・国際色豊かな天平文化の開花という展開を見せていきます。そうした華やかな奈良時代の歴史を概観的に紹介いたします。

第1章 飛鳥から奈良へ

702—720

藤原京と大宝律令の完成により律令国家の体裁を整えた日本は、そのことを中国に知らせるとともに、白村江の戦い以来断絶状態にあった唐との正式国交を回復するために、粟田真人を代表とする遣唐使を派遣しました。しかし、真人が見た中国は想像以上にレベルが高く、日本の未熟さを痛感して帰国します。真人の報告を受けた文武天皇と藤原不比等は、新たな改革を進め、平城京へと遷都することになったのです。

粟田真人の見た中国

702年、中国に着いた粟田真人は、長安の都を見て愕然としました。藤原京は中国の古い文献に基づいて「中華思想」を具現化した理想の都であると自負していましたが、長安の都城制に見られる思想は、機能性を重視した現実的なものだったのです。また、律令も形式的なものではなく、社会の実態に合わせて实际的に運用されており、貨幣経済が人々の生活にしっかりと根付いていて、にぎやかに市が開かれているなど、想像以上の現実がそこにありました。

平城京遷都へ

粟田真人の報告を受けた文武天皇や藤原不比等らは、社会の実態に合わせた制度への改革に乗り出しました(慶雲の改革)。ところが707年、文武天皇が25歳の若さで亡くなり、その長子の首(おびと)皇子(のちの聖武天皇)はわずか7歳でしたので、文武の母・阿閑(あへ)皇女が首皇子への中継ぎとして即位し、元明天皇となりました。

元明朝においても改革は進められ、708年、貨幣制度を整えるために和同開珎が発行されました。また、藤原京の問題点を解消し都としての機能を向上させるために、新都造営が進められ、710年、平城京に遷都されました。

都と律令制の整備

平城京には、王族・貴族の邸宅のほか、官大寺や氏寺も次々と移されて、都としての威容が整えられていきました。中でも大官大寺は大安寺と名前が改められて、唐の西明寺にならった「仏教の殿堂」としての整備が道慈によって進められました。

また、都と地方を結ぶ交通網の整備とともに、『古事記』『日本書紀』といった歴史書や諸国の地誌をまとめた『風土記』の編纂、「養老律令」につながる律令の改訂などの作業が、藤原不比等を中心に進められていきました。

さらに717年、のちに国内外で活躍する阿倍仲麻呂、吉備真備、僧玄昉らが留学生として唐に渡るなど、遣唐使による中国との直接外交も展開されるようになりました。

関係年表

- 663 白村江の戦い
- 665 第5回遣唐使（百済駐留の唐軍と交渉？）
- 667 第6回遣唐使（百済駐留の唐軍と交渉？）
- 669 第7回遣唐使（百済駐留の唐軍と交渉？）
-
- 690 武則天が武周朝を建てる（唐朝の中断／～705）
- 694 藤原京遷都
- 697 文武天皇即位
- 701 「大宝律令」完成（刑部親王、藤原不比等ら）
藤原不比等が大納言となる
- 702 第8回遣唐使（粟田真人、山上憶良、道慈ら入唐）
- 703-707 飢饉が連続的に発生
- 704 遣唐使帰国（粟田真人、山上憶良ら帰国）
＜この頃、慶雲の改革＞
- 707 文武天皇逝去、元明天皇即位
- 708 和同開珎鑄造 藤原不比等が右大臣となる
- 710 平城京遷都 藤原氏の氏寺(厩坂寺)を平城京に移し、興福寺とする
- 711 「蓄銭叙位令」を發布し、貨幣の流通を促す
- 712 『古事記』の撰上（太安万侶）
- 713 『風土記』の編纂を諸国に命じる
- 715 元明天皇が譲位し、元正天皇即位
- 716 大官大寺を平城京に移し、大安寺とする
- 717 長屋王が大納言となる
- 第9回遣唐使（阿倍仲麻呂、吉備真備、玄昉ら入唐。翌年道慈が帰国）
- 718 「養老律令」の編纂（藤原不比等）
薬師寺を平城京に移す 飛鳥寺を平城京に移し、元興寺とする
- 719 粟田真人死去
- 720 藤原不比等死去
『日本書紀』の撰上（舎人親王ら）

※上記年表中に使用している文字体のうち

- ゴシック体（太字）は「通史」
 - 明朝体（細字）は「国家の確立」
 - 青字（下線）は「仏教の展開」
 - 赤字（斜体）は「東アジアとの国際交流」
- の各ストーリーと主に関係する出来事を示している。

藤原不比等が亡くなると、政治の主導権は皇親勢力の代表である長屋王が握りました。長屋王は三世一身法の制定による税制改革や、多賀城を拠点とする東北地方の治安維持などの政策を進めましたが、不比等の4人の息子たち(藤原四子)は、異母妹の光明子を皇后に擁立しようと画策し、長屋王と対立するようになりました。

長屋王の登場

長屋王は、天武天皇の嫡流の孫として、叔父・舎人(とねり)親王とともに皇親の中心的存在でした。また長屋王の妃・吉備内親王は元明天皇の娘で、715年に即位した元正天皇の妹にあたり、両天皇は長屋王に厚い信頼を寄せていました。720年に不比等が亡くなると、藤原四子がまだ若かったこともあって、長屋王が政界の主導者として台頭しました。

光明子立后への動き

727年、聖武天皇の妃・光明子に待望の男子が生まれ、藤原四子はその基(もと)王を生後1ヶ月で立太子しましたが、1年も満たずに亡くなってしまいます。そして728年、藤原氏の血筋ではない安積(あさか)親王が生まれると、その立太子を妨げるために、藤原四子は光明子を皇后に立てようと考えたのです。これに対し長屋王は、藤原氏勢力の伸張を押さえるため、光明子立后に反対しました。これをきっかけに長屋王と藤原四子の対立が表面化し、729年、長屋王が天皇を呪詛(じゅそ)し謀反を起こそうとしているとの噂が流れ、王は吉備内親王とともに自殺に追い込まれました(長屋王の変)。

藤原四子政権

長屋王の変のあと、光明子は皇族以外で初の皇后となりました。藤原武智麻呂、房前(ふささき)、宇合(うまかい)、麻呂の四兄弟もそれまでの慣例を破って同時に閣僚となって、同じ藤原氏の血縁である聖武天皇と光明皇后を支えるという、異例づくしの政治体制ができました。

藤原四兄弟が政権を担ったこの時期、政情は比較的安定し、税収も豊かでした。遣唐使の派遣や各地方の軍団の強化策など、外交や軍事の政策も積極的に進められました。733年に派遣された遣唐使では、のちに鑑真の招請に尽力する普照や栄叡(ようえい)が中国に渡り、そして735年の復路船では、吉備真備や玄昉が帰国、またのちの大仏開眼供養会で導師を務める菩提僊那らの外国人も多数来日し、日本の文化興隆に貢献しました。

天然痘の大流行

ところが、734年頃から大地震や飢饉が続発し、さらに737年の天然痘の大流行は、全人口の25～35%が死亡するという大惨事となりました。そして藤原四兄弟もこれに巻き込まれ、4ヶ月の間に全員が病死して、政府の中核組織は危機的な状況に陥りました。

こうした状況下で政権を担当することになったのが、光明皇后の異父兄で、皇族出身の橘諸兄でした。

関係年表

- 721 **長屋王**が右大臣となる
山上憶良が東宮(のちの聖武天皇)の侍講を務める
- 722 百万町歩の開墾計画が発表される
- 723 **「三世一身の法」の発布**
興福寺に悲田院が設置される
- 724 元正天皇が譲位し、聖武天皇が即位
長屋王が左大臣となる
聖武天皇の生母・藤原宮子に「大夫人」の称号を贈ることが問題となる
陸奥国に**多賀城**が造られる
- 726 *山上憶良が筑前国司として赴任* ○この頃「貧窮問答歌」を詠む
- 727 光明子が基王を産む。1ヶ月後、基王は皇太子に立てられる
- 728 基王が亡くなる
- 729 **長屋王の変がおこる**
光明子が皇族以外で初めて**皇后**となる
道慈が律師に任じられる
- 730 薬師寺の東塔、興福寺の五重塔が建立される
光明皇后が施薬院を設置する
- 731 藤原四兄弟全員が参議以上となる（藤原四子政権）
- 733 **第10回遣唐使**（普照、栄叡ら入唐）
- 734 藤原武智麻呂が右大臣となる
天平大地震が起こり多数の死者が出る（畿内を中心にM7.0）
遣唐使帰国（**吉備真備、玄昉**らが帰国。菩提僊那、道璿、仏哲ら来日）
- 735 九州で天然痘が流行し、多数の死者が出る
- 736 葛城王が臣籍に下り、**橘諸兄**と改名
- 737 **天然痘**が再流行し、全国に拡大する**大流行**となる
藤原四子が天然痘により相次いで死去する

※上記年表中に使用している文字体のうち

- ゴシック体（太字）**は「通史」
 - 明朝体（細字）**は「国家の確立」
 - 青字（下線）**は「仏教の展開」
 - 赤字（斜体）**は「東アジアとの国際交流」
- の各ストーリーと主に関係する出来事を示している。

光明皇后の異父兄である橘諸兄が実権を握ると、吉備真備や僧玄昉らの下級氏族を登用しました。ところが、これに不満をもった藤原広嗣が九州で反乱を起こし、社会不安が拡大します。動揺した聖武天皇は平城京を離れて遷都を繰り返しますが、やがて社会の安定を仏の加護を求めるようになり、大仏造立による鎮護国家の実現を目指したのです。

橘諸兄の政治改革

吉備真備は地方出身の下級役人でしたが、博識な学者で聖武天皇、光明皇后の寵愛を受け、また玄昉は唐の玄宗皇帝に才能を認められた逸材で、聖武天皇の生母・藤原宮子の病気を祈祷により回復させ、天皇の信頼を得ていました。

橘諸兄は、公民の負担軽減を図る政策や、荒廃した耕地を再開墾させる墾田永年私財法の発布、地方行政を簡素化などの改革を展開しました。

藤原広嗣の反乱

一方で、橘諸兄の政治に不満を露わにする人々もあり、藤原広嗣もその一人でした。広嗣にはもともと横柄な言動が多く、政務が混乱しがちでした。諸兄が彼を大宰府に左遷すると、これを不服として740年、真備・玄昉の排除および諸兄の退陣を要求して、広嗣が九州で反乱を起こしました。

大仏造立の詔

2ヶ月後に藤原広嗣の乱は鎮圧されましたが、地震、飢饉、疫病そして反乱と相次いだ災いに、聖武天皇は統治者として心を痛め、やがて仏に守護された新しい都を造ろうと考え、恭仁(くに)京や紫香楽(しがらき)宮に行幸するようになりました。その頃、諸国を遊行して社会福祉活動を展開し、庶民の大きな支持を得ていた僧行基に大仏造立事業への協力を要請した天皇は、743年、天下泰平を願って「大仏造立の詔」を発表しました。

遷都の繰り返し

その後も大仏造立の適地を求めて、難波(なにわ)宮や紫香楽宮への行幸が繰り返される中で、病気がちな聖武天皇の後継をめぐる藤原氏と皇親勢力の水面下での争いも展開されました。

そして大仏造立の地に決まりかけた紫香楽宮周辺で山火事や地震が頻発すると、天皇は平城京への遷都を決断し、大仏造営事業も東大寺で行われることになりました。

鎮護国家の実現

741年に発せられた詔に基づいて、国分寺・国分尼寺が全国に建立され、東大寺はその本山として総国分寺に位置づけられ、この世のすべての生命あるものを光で満たすという祈りを込めて盧舍那大仏の造立が進められました。

そして日本への仏教伝来200年にあたる752年に、大仏の完成を祝う「大仏開眼供養会」が盛大に開催されました。この大イベントは、仏教によって国を護るという鎮護国家の思想が実現したものであるとともに、うち続く国難を乗り越えて日本が復活し、その都・平城京は、唐の長安と肩を並べるような国際都市に成長したことを象徴する出来事でした。

そして、その翌年末には唐の高僧・鑑真が伝戒師として来日し、戒律制度が整備されて優秀な僧侶が輩出されるようになって、仏教はさらに発展していきました。

関係年表

- 737 [玄昉が僧正に任じられる](#)
- 738 橘諸兄が右大臣となり、吉備真備、玄昉らを登用する
藤原広嗣が大宰府に左遷される
- 740 [聖武天皇が、河内国の智識寺で盧舎那仏を拝顔し、大仏造立を発願する](#)
藤原広嗣の乱が起こる
天皇が**恭仁宮**に行幸し、**新都造営**を開始する
- 741 [「国分寺・国分尼寺建立の詔」を発する](#)
- 742 近江国・**紫香楽**に**離宮造営**を開始する
- 743 橘諸兄が左大臣となる
「**墾田永年私財法**」の発布 「**大仏造立の詔**」を発す
- 744 **難波宮**を都と定める
[紫香楽の甲賀寺において大仏造立が開始される](#)
- 745 [行基が大僧正に任じられる](#)
平城京に都を戻し、大仏造立事業を金光明寺(東大寺)に移す
[法華寺が創建され、総国分尼寺に位置づけられる](#)
- 746 *第11回遣唐使が計画されたが、中止となる*
- 747 東大寺で大仏鑄造が始まる(～749) (*国中公麻呂*)
- 749 [行基が死去\(菅原寺<喜光寺>\)](#)
聖武天皇が譲位し、孝謙天皇が即位
藤原仲麻呂が、大納言および紫微中台の長官となる
[東大寺の守護神として手向山八幡宮が建立される](#)
- 750 吉備真備が筑前守に左遷される
- 751 *最古の漢詩集『懷風藻』が完成する*
- 752 東大寺大仏の開眼供養会が開催される
第12回遣唐使(藤原清河、吉備真備、大伴古麻呂ら)
- 753 遣唐使帰国(大伴古麻呂、吉備真備、普照ら帰国。**鑑真**ら来日)
- 754 **鑑真一行が入京し、東大寺で聖武上皇、孝謙天皇らに授戒を行う**

※上記年表中に使用している文字体のうち

- ゴシック体(太字)は「通史」
 - 明朝体(細字)は「国家の確立」
 - 青字(下線)は「仏教の展開」
 - 赤字(斜体)は「東アジアとの国際交流」
- の各ストーリーと主に関係する出来事を示している。

藤原仲麻呂が実権を握ると、それまでの相次ぐ造宮や大仏造営による徴税に苦しむ庶民の負担を軽減し、また橘諸兄によって登用されていた吉備真備を九州に左遷して専横の度合いを強めました。さらに反対派の橘奈良麻呂らの反乱を事前に鎮めて権力を確固たるものにしました。

藤原仲麻呂の台頭

749年、孝謙天皇が即位すると、藤原仲麻呂は一気に大納言に昇進し、光明皇太后と孝謙天皇の信任を得て、左大臣・橘諸兄を上回る実力を手に入れました。そして756年に橘諸兄が政界を引退すると、諸兄によって登用された吉備真備を大宰府に左遷し、また皇太子を大炊(おおひ)王(のちの淳仁天皇)に変更したり、祖父の藤原不比等が手がけた養老律令を施行したりするなど、仲麻呂は政治の実権を独占するようになりました。

橘奈良麻呂の乱

こうした仲麻呂の政治に不満を持つ橘奈良麻呂らは、同調者を集めて反乱を起こそうと画策しました。密告により発覚したこの事件は、橘奈良麻呂のほか道祖(ふなど)王、大伴古麻呂、小野東人ら、関係した皇族、有力氏族など400人以上が処罰される大事件に発展し、仲麻呂の反対派が一掃されたのです。

華やかな天平文化

仏教を厚く信奉した光明皇后によって活躍の場を与えられた仏師たちは、国際的にも水準の高い仏像を数多く残しました。東大寺の盧舎那大仏は鑄造仏としては世界最大のもので、興福寺の八部衆像(阿修羅像など)や十大弟子像、東大寺法華堂の不空罽索観音像、唐招提寺の盧舎那仏坐像や鑑真和上像などは乾漆造、新薬師寺の十二神将像などは塑造という大陸伝来の技術を用いて作られました。

756年に聖武上皇が亡くなると、光明皇太后は上皇遺愛の品や薬類を東大寺の大仏に奉獻しました。皇太后の甥にあたる藤原仲麻呂によって、それらの品々は正倉院に納められ、大切に保管されました。

その宝物は国際性豊かで、地中海やアフガニスタン、東南アジア、中国など世界各地の材料を用いて作られています。また奈良時代に寺院の法要などで演じられた伎楽の仮面もあり、そこにも中国やインドシナ、インド、ペルシアなど、様々な民族の特徴が見られます。

唐風政治の推進

758年に淳仁天皇が即位すると、仲麻呂は官名を中国風に改める唐風政策を推進し、自らの名も「恵美押勝」と改めてさらなる改革を進め、唐の律令をまねた本格的な律令国家の実現を目指しました。そして760年、皇族以外では初となる大師(太政大臣)の位も賜ったのです。

ところが、760年に光明皇太后が亡くなると、強力な後ろ盾を失った恵美押勝の権力に陰りが見え始めます。孝謙上皇の病気を治療したことから、僧道鏡が上皇の寵愛を受けて台頭してきたのです。

関係年表

- 755 唐で安史の乱が起こる
東大寺戒壇院が創建される
- 756 **橘諸兄が政界を引退**
聖武上皇逝去
光明皇太后が、**聖武上皇の遺品の大半を東大寺等へ献納する（正倉院宝物）**
- 757 藤原仲麻呂が「**養老律令**」を施行する
橘奈良麻呂の乱が事前に発覚する
- 758 孝謙天皇が譲位し、**淳仁天皇**が即位
藤原仲麻呂が**唐風政策**（官名の唐風化など）を行う
藤原仲麻呂が大保（右大臣）となり、「**恵美押勝**」の名を賜る
東大寺金堂（大仏殿）が完成
鑑真に「大和上」の称号が贈られる
- 759 唐招提寺が建立される
第13回遣唐使（安史の乱の影響で目的〈藤原清河の帰国〉を果たせず）
○ *この年以降に『万葉集』が成立（大伴家持）*
- 760 **恵美押勝（藤原仲麻呂）が、皇族以外で初めて大師（太政大臣）となる**
光明皇太后逝去
- 761 *第14回遣唐使*（船破損のため中止）
- 762 孝謙上皇が病気になり、道鏡の看病により平癒する（**道鏡の台頭**）
孝謙上皇と淳仁天皇が不和となり、上皇が天皇の権限を剥奪する
第15回遣唐使（渡海できず中止）

※上記年表中に使用している文字体のうち

- **ゴシック体（太字）** は「通史」
 - **明朝体（細字）** は「国家の確立」
 - 青字（下線） は「仏教の展開」
 - *赤字（斜体）* は「東アジアとの国際交流」
- の各ストーリーと主に関係する出来事を示している。

僧道鏡の台頭に脅威を感じた恵美押勝(藤原仲麻呂)は、先手を打って挙兵しましたが、九州から呼び戻された吉備真備らの軍によって鎮圧され、失脚しました。淳仁天皇を廃して重祚した称徳天皇は、道鏡を重用して仏教政治を展開し、道鏡は太政大臣・禪師、次いで法王の地位に就き、大きな権力を手にしたのです。

称徳天皇の政治

恵美押勝の乱後、淳仁天皇に代わって孝謙上皇が重祚し、称徳天皇となりました。天皇は道鏡を太政大臣・禪師に任命し、翌年法王の位につけて仏教の理念に基づいた政策を推進しました。西大寺、西隆寺の造営や百万塔の作製などが行われ、国分寺、国分尼寺の制度が確立したのもこの頃です。

一方で道鏡の弟の弓削浄人が大納言に昇進したのをはじめ、一門の者の多くが異例の昇進をしたことや、道鏡が法体で政務に参与したことに対し、藤原氏らが不満を高めていきました。

宇佐八幡宮神託事件

女帝の称徳天皇は独身で子供がおらず、皇位継承をめぐってのトラブルが続発し、政情が不安定となっていました。そのような中で769年、「道鏡を皇位に就ければ、天下は泰平になる」という内容の宇佐八幡宮の神託が天皇のもとに届きました。喜んだ称徳天皇はその神託の真偽を確認させるため、和気清麻呂を宇佐に派遣したのです。

ところが和気清麻呂は、「天皇には必ず皇族を就けよ」という神託を持ち帰り、道鏡を皇位に就けたいと願っていた天皇を激怒させました。道鏡が皇位に就くことは阻止されましたが、仏教勢力が大きく関与するようになった政界は混乱の度合いを強めました。

しかし770年、称徳天皇が亡くなると、道鏡は関東に左遷され、天皇の後継として天智天皇の孫にあたる光仁天皇が即位しました。

長岡京遷都

781年、光仁天皇は山部親王に譲位し、桓武天皇が誕生しました。桓武天皇は仏教色に彩られた平城京の政治を刷新するために、新たな政治の舞台を求めて遷都を決意しました。

そして784年、長岡京遷都が行われ、奈良時代は幕を閉じました。

関係年表

- 763 [鑑真和上が死去](#)
- 764 吉備真備が造東大寺司長官として中央政界に復帰する
恵美押勝の乱が起こる（恵美押勝は敗死）
 淳仁天皇を廃し、**孝謙上皇が重祚し称徳天皇となる**
淡海三船が漢風諡号を撰上する（762～764）
東大寺南大門および東西の塔が完成
- 765 **道鏡が太政大臣・禪師となる**
[西大寺が創建される](#)
- 766 **道鏡が法王**、藤原永手が左大臣、吉備真備が右大臣となる
- 768 道鏡の弟・弓削浄人が**大納言**となる
- 769 **宇佐八幡宮神託事件**が起こる
- 770 *阿倍仲麻呂が唐で客死*
[称徳天皇が陀羅尼經を納めた百万基の小塔\(百万塔\)を作製する](#)
 称徳天皇逝去し、**光仁天皇**が即位
道鏡が下野薬師寺に左遷され、弓削浄人は土佐に流罪となる
- 771 光仁天皇の子、他戸親王が皇太子となる
 吉備真備が政界を引退
東大寺大仏に光背が設置され、すべての造営が完了する
石上宅嗣が、最古の図書館である芸亭を建設
- 772 天皇を呪詛したとして、井上内親王が皇后を、他戸親王が皇太子を廃される
- 773 山部親王(のちの桓武天皇)が皇太子となる
- 775 吉備真備が死去
- 777 *第16回遣唐使*
- 778 *第17回遣唐使*
- 779 *藤原清河が唐で客死*
- 781 光仁天皇が譲位し、**桓武天皇**即位
- 784 **長岡京に遷都**
- 794 平安京に遷都

※上記年表中に使用している文字体のうち

- ゴシック体（太字）**は「通史」
 - 明朝体（細字）**は「国家の確立」
 - 青字（下線）**は「仏教の展開」
 - 赤字（斜体）**は「東アジアとの国際交流」
- の各ストーリーと主に関係する出来事を示している。

